

## 大串明弘作 「デジタル・ワールド」

<前編>

- (効果音) (カチャカチャとパソコン入力音。)
- 金子由美 (フィルター音)(電話の相手側)そっかあ、今度の土曜日も忙しいんだあ。
- 本田政男 ああ、悪いな。…何だよ、畜生！ ったくうまく動かねえなあ。
- 由美 (フィルター音)ねえ、政男。…お願いがあるんだけど、怒らないで聞いてくれる？
- 政男 そりゃあ、事と次第によるけど、何だよ。言ってみろよ。
- 由美 (フィルター音)これって、わたしのわがままかもしれないけど、…できたらわたしと話してるときは、パソコンやるのやめてくれないかなあ。
- 政男 え？ 何言ってるんだよ。今、お前のためにプログラム組んでんじゃないか。お前が、デジタルムービーで、お前の顔からおれの顔に変身するやつが欲しいって言うから、説明書と首っ引きでやってんだよ。一番難しいテクニックなんだぞ。もうこれで3日徹夜してんだから。
- 由美 (フィルター音)それは確かに有り難いし、感謝してるよ。でもわたしは政男と1対1で話がしたくて電話してるんだから、何て言うのかな、わたしだけに注意を向けて欲しいの。パソコンとか、ほかのことやりながらじゃなくて。
- 政男 (ため息)あのなあ、おれはお前のためを思って、今夜って時間を惜しんでプログラム組んでんだぞ。分かってんのかあ？
- 由美 (フィルター音)でも、今日だけじゃなくていつも沿うじゃない。わたしが悩みを相談しているときだって、カチャカチャやりながら上の空で聞いているじゃない。
- 政男 おれだって、いろいろとやりたいことはあるんだよ。ソフトのインストールとか、カスタマイズとか。手っ取り早く言えば、パソコンの整備だよ。パソコンも、より便利に使うようにするためには、いろいろとやんなきゃいけないことも多いんだよ。
- 由美 (フィルター音)確かにパソコンは便利な道具だと思う。政男と付き合い始めて、パソコンっていろんなことができるんだなっていつも感心してた。でも、わたしと話したり、デートしたりする暇を惜しんでまで、そんなに一生懸命パソコンを整備してどうなるの？
- 政男 どうなるって…。べ、便利になるに決まってるじゃんかよ。こないだだって、お前が友達とディズニーランドに行くって言ってたから、行き方とか、ディズニーランドの天気とか、こいつを使って調べてやったじゃないか。
- 由美 (フィルター音)でもわたし、(涙ぐむ)本当は政男と行きたかったんだよ、ディズニーランド。いつもお休みの日だって、何だかんだ言ってパソコンばかりやっ

てあってくれないし、電話したってちゃんと話も聞いてくれないし…。

政男

それはなあ…。

由美

(フィルター音)(かぶせて)デートの時間も惜しんで、…うん、電話の時間さえ惜しんで整備するほど、パソコンが大事なの？ そんなに便利な生活がいいの？ 便利な生活って一体何？ わたしもよく分かんないけど、でも今の政男は、パソコンを使うって言うより、パソコンに使われているって感じがしてしょうがないの。そんな政男には、もうわたし…会いたくない！

(効果音)

(ガチャリと電話が切れ、ツーツーツの音。)

政男

由美、おい由美！ ふざけんなよ！ 今まで散々パソコンの恩恵受けといて、ちょっと自分の都合が悪くなるとこれだよ。全く、やってらんねえよ！

ナレーション

おれの名前は本田政男。青春大学1年生。今の電話の相手は、ガールフレンドの金子由美。彼女は、大学に入って知り合った同級生。おれは、西芝電気の重役をしているおやじから、情報の大切さやマルチメディアの将来性についていろいろと聞かされてきた。その影響で、おれはパソコンに凝っている。確かにパソコンはだんだん高性能になってきたし、かなり実用性がある。おやじは、もう少ししたら電話のようにだれもが使えるようになっていっている。しかし残念ながら、今はまだだれもが簡単にパソコンを使いこなせるほど一般化していないから、パソコンを活用するためには、それなりの知識と努力が必要なんだ。便利な生活をするためには、それくらいは仕方がない。由美にはそれが全然分かっていないのだ。

(効果音)

(携帯電話の呼び出し音)

政男

お、もうおわびの電話かあ？ もしもし。

朝倉純

(フィルター音)政男？ おれだよおれ、純f！

政男

おー、純か！ 久しぶりだなあ。高校の卒業式以来か。

ナレーション

こいつは、中学時代からの親友で、朝倉純。高校も一緒だったが、大学は別々になり、しばらく電話が途絶えていたので、そろそろ電話でもしようかと思っていたところだった。

純

(フィルター音)久しぶり。元気でやってるかい？

政男

おれは相変わらず忙しくしてるよ。

純

(フィルター音)またパソコンかあ？

政男

そんなとこかな。まあ、一応彼女とかもできたんだけどさ、何だか最近うるさいことばっか言い出してきたから、ちょっとうんざりしてるよ。

純

(フィルター音)ええ？ お前に彼女ができたって？ お前みたいなパソコンお宅でも付き合ってくれる人がいるんだ。(2人笑い)それじゃ大切にしなきゃな。

政男

はあ、そのことなんだけどさあ。

ナレーション

おれは、順にさっきの彼女との電話での話をした。付き合ったきっかけや、おれ

がどれほど彼女を好きかも。さっきみたいに、たまには煙たがったりするけれど、内心は結構彼女を気に入っていたのだ。

純 (フィルター音) そっかあ。ひそかに結婚まで考えてるんだ。お前にしてはまじめだね。

政男 まあな。これでもおれ、結構気を遣ってんだぜ。自慢のパソコンを駆使して、彼女へのプレゼントに、外国の珍しい花を直輸入したりしてさ。

純 (フィルター音) (少し驚いて) へえ、パソコンってそんなこともできるんだ。

政男 それも簡単にね。まあ確かに、何でそんなにパソコンばかりやってるのって言う、由美の不満は分からないでもないよ。デモさ、いざあることをしたいとか調べたいと思ったときに、パソコンの使い方を勉強したり、ソフトを買ってきたりしたんじゃ遅いじゃん。情報はスピードが命だ。時間とともに価値が変わる。それが情報ってもんだらう？ コンピューターネットワークに接続すれば、様々な情報が手に入る。それも最新情報がね。それに堅い話は抜きにしても、実際におれの生活も徐々に便利になってきてるんだぞ。パソコンにアドレス帳を入力してあるから、ワンタッチでだれにでも電話ができる。もちろんかけ違いなど絶対ない。話し中ならかってにリダイヤルしてくれる。だから、コンサートのチケットを予約するときなんか、高い金出して予約を取ってもらわなくていいんだ。つながるまでパソコンが何百回でも何千回でもかけ続けてくれるから。それに、今じゃパソコンがファックスや留守電にまでなっちゃうんだぜ。便利だろう？ おい、これ秘密の話だけどよ、競馬予想ソフトってのがあってさ、これが結構な確立で当たったりするわけよ。何か、今じゃ馬にもハマっちゃって…。

純 (フィルター音) (かぶせる) おい政男、そういう生活がそんなに楽しいのかい？

政男 え？ あ、当たり前なこと聞くなよ。人が知らない最先端の技術を使いこなして、人よりも快適で楽な生活をする。こんな快感はほかにはないぞ。それに大体今の日本人は非合理的だ。企業だってもっと積極的に最先端の技術を取り入れていけば、人件費だって削減できるし、生産性も向上するし、何より労働時間が短縮されて、余暇が増える。そうすれば、より豊かな生活ができるじゃないか。違うか？

純 (フィルター音) 確かに、コンピューターの進化が人間にもたらした影響は大きいし、これからもそうだと思う。でも、そんな便利さを、果たして豊かな生活と言えるのか？ おれは、お前の言っている生活が豊かだとは思わない。何て言ってもいいのかわからないけど、技術や科学が進歩して、便利になればなるほど、逆に貧しくなるってこともあるだろう。いや、貧しいどころか、不幸だよ。

政男 おい、どうしたんだよ。そんなにムキになって。

純 (フィルター音) …ごめん。別にそういうわけじゃないんだけど。…実はさ、おれ、最近教会に行ってるんだ。

政男 教会？ 教会って、キリスト教のか？ お前がミサとか出てんの？  
純 (フィルター音)おれが行ってるのは、カトリックじゃなくてプロテスタントの教会だからミサとは呼んでないけどね。

政男 それにしても、昔から宗教嫌いだったお前が、どうして教会なんかに行って…  
(効果音) (どさっと政男が倒れる音)  
純 (フィルター音)…政男？ もしもし、政男？ おい、どうしたんだよ。政男！ 政男ー！（多重エコー）

ナレーション 突然、目の前が真っ暗になった。強烈なめまいに襲われ、おれはそのまま倒れてしまったのだ。薄れゆく意識の中、おれの頭の中では、おれの名を呼ぶ純の聲がただこだましていた。

<中篇>

純 (フィルター音)…政男？ もしもし、政男？ おい、どうしたんだよ。政男！ 政男ー！（多重エコー）

ナレーション 突然、目の前が真っ暗になった。強烈なめまいに襲われ、おれはそのまま倒れてしまったのだ。薄れゆく意識の中、おれの頭の中では、おれの名を呼ぶ純の聲がただこだましていた。

(音楽) (重々しい感じ)(10年後、西暦2005年)  
(効果音) ピピピピ、ピピピピ…(不快な電子音が鳴り続く。)

政男モノローグ うーん、何だよ、この耳障りな音は？  
コンピューター (効果音)(機械音声)意識レベル3、意識レベル3。  
モノローグ な、何だ？ だれなんだ？  
ナレーション 目を開けてみた。まぶたが異常に重い。真っ白い壁が見える。辺りを見回してみた。おれは、明るい小さな個室にいた。飾ってある花に日が当たり、妙にまぶしい。部屋にはほかにだれもいなかった。

モノローグ 一体おれはどこにいるんだ？ おれはどうしたんだ？  
医師 本田さん、聞こえますか？  
ナレーション 不愉快な音が途絶えたと思ったら、急に耳元から声がして、驚いた。  
政男 だ、だれ？  
ナレーション 正面の壁のモニタースクリーンのようなものに、医者らしい人が映っていた。  
医師 わたしは、あなたの担当医の酒井です。個々は病院です。安心してください。  
ナレーション もう一度、周りを見た。病室と言われれば、そんな感じがしないでもないが、設備らしいものが何もない。ただ、1本の細いコードが自分のパジャマの中から出て、壁のジャックに接続されているだけだった。

医師 本田さん、まだしばらくは、あまり動かないでくださいね。身体機能は回復しましたが、心臓にかかる負担が非常に大きいので。血圧、脈拍、脳波、血中成分正

常。うん、もう大丈夫ですね。

モノローグ 「血圧、脳波、血中成分正常」って、どうしてそんなこと、調べもしないで分かるんだ？ 大体おれは一体何でここにいるんだ？ 何かここ、普通の病院じゃないぞ。第一、看護婦すら来ないじゃないか。あの、壁のモニターみたいなのは何か？

ナレーション おれの頭の中は混乱していた。大分長い間眠っていたような気がするが、一体何が起こったんだ？

純 (フィルター音) おい、政男！ どうした政男？ 政男！（多重エコー）

モノローグ そうだ！ 純と電話をされていて、急にめまいがして…。そっか、おれは気を失ったんだ。

医師 そうです。あなたは原因不明の病気で長い間、意識不明の重体だったのです。

ナレーション 一瞬、嫌な予感がした。

政男 長い間って、…どれくらいですか？

医師 10年です。

政男 じゅ、10年？ …ってことは、今は…。

医師 今は西暦2005年の4月です。

ナレーション おれの頭はますます混乱してきた。

モノローグ 10年？ 2005年？ ゆ、夢か？ そうだ、夢だ！ 夢に違いない。でも、もし本当だとしたら、おれはもう30歳になろうとしているのだ。ウソだろう… ウソに決まってる！

医師 お気持ちはお察しします。さぞかしショックでしょうね。何しろ19歳の時からずっと眠り続けていたのですから。

コンピューター 意識レベル4、意識レベル4。

政男 この声は何ですか？

医師 それはコンピューターです。ちょっと興奮されているようですね。後で安定剤を出しますから飲んでくださいね。あ、お父様からお電話です。じゃ、何かありましたらいつでも呼んでください。お大事に。

政男 ちょ、ちょっと待って！ 呼んでって、どうやって…。

ナレーション すると、医師と入れ替わりに、壁のモニターにおやじの顔が映った。察するところ、これは超薄型のテレビモニターで、医務室のテレビ電話と回線でつながっているらしい。

政男の父 政男、政男！ おお、やっと意識が戻ったか！ 神様、ありがとうございます！ 大丈夫か？ 何か話せるか？

政男 倒産、何言ってんだよ。おれはいつもどおり元気だよ。それにしても何か年取ったね、父さん。

父 そうか、…そうだよなあ。…お前にとっては、昨日の出来事のようなものなんだ

よなあ。お前が倒れて意識がなくなってから、いろいろあったんだよ。

モノローグ やっぱり、これは夢じゃないんだ。…現実なんだ。

父 お前が驚くのも無理はない。10年間でこんなに変わってしまったんだからなあ。

政男 父さん、おふくろは？ 母さんはどうしてる？

父 今のお前にこんなことを言うのは酷かもしれないが、隠しておくわけにもいかんだろうな。政男、落ち着いて聞いてくれ。母さんは8年前に亡くなったよ。

政男 え？ 母さんが…母さんが死んだ…？

父 ああ。お前が倒れて原因不明の意識不明状態が続き、医者から植物人間と宣告されたのに、母さんは、お前は絶対治ると言って毎日毎日病院へ行って世話をして…。過労と心労がたたったのか、風邪をこじらせて肺炎になり、そのまま息を引き取ったんだよ。

政男 母さんが…死んだ…。

ナレーション 悲しかった。とても悲しかった。おれの回復を信じて、一生懸命看病して、早死にしてしまった母さん…。

父 だがな、政男。もう二度と母さんに会えなくなったわけじゃない。

政男 え、どうして？ どういうこと？

父 わたしたちには、天国で母さんに会えるという希望があるんだよ。母さんはクリスチャンになったんだ。そして、今ではわたしもイエス様を信じてる。

政男 ということは、父さんもクリスチャンでわけ？ 母さんはともかく、宗教を毛嫌いしていた父さんが、どうしてクリスチャンになんてなったんだい？

父 あ、今先生が「もうそろそろ終わりにして休ませなさい」とおっしゃってるから、この続きはまた後でゆっくり話そう。お前が信仰を持つように祈っているよ。じゃあな。

ナレーション 不思議だった。西芝電気の重役であると同時に、優秀な技術者だった父はよく言っていた。「宗教など弱い人間の信じるものだ。昔ならともかく、今は科学がある」と。でもあの元気だったおふくろは死んでしまい、自分以外何も信じなかったおやじが神を信じたなんて…。すべてが現実離れしていた。

モノローグ これからおれは、どうやって生きていったらいいんだろう？

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション おれが意識を回復してから3日がたった。看護婦が一日に数回来ただけで、後はだれも来てくれない。医者の診察もない。すべて、コンピューターが計る患者の身体機能データと、医務室から各病室へのモニターの問診で済ませてしまうのだ。そもそも、通信環境の整備と、テレビ電話の普及で、病院へ出向いたり入院することもまれになったらしい。在宅医療というやつだ。コンピューターももはや昔のように難しいものではなく、前におやじが言っていたように、だれでも使えるものになってきているらしい。それもそのはずだ。もはや難しいキー操作

は要らず、コンピューターに語りかけさえすれば、ちゃんと動いてくれるのだから。便利な世の中になったものだ。しかし、そのためにもうだれも見舞いにきてくれる人がいない。おやさえも。快適になった世の中に驚きと喜びがある反面、何か寂しい気がする。

(効果音)

(ドアのノック音)

モノローグ

あれ？ だれだろ、ドアをたたくなんて。

ナレーション

そう、病室に入るにはチャイムを鳴らすのが常識で、もはやノックする者などいないはずだった。おれはじっとドアの開くのを待った。

<後編>

純

政男、起きてるか？

ナレーション

入ってきたのは、すっかり落ち着いた社会人になってはいたが、あの親友の朝倉純だった。

政男

純、純じゃないか！ わざわざ来てくれたのか？

純

ああ。20 世紀に人間にはやっぱり花を持って、直接見舞いに來るのが一番と思っただ。

政男

それにしても、お前、立派になったなあ。

純

まあな。今じゃおれも 2 児の父親だよ。

政男

へえー、そうか！

純

そういうお前も元気そうじゃないか。ま、今はとにかく薬や食べ物がいいから、回復が早いよ。こないだおやじがガンで手術したんだけど、3 日後には元気で退院してきたからな。

政男

え？ ガンの手術して 3 日で退院？

純

まあ、今じゃ驚くことじゃないよ。ところで、どうだい、便利な生活は？ お前の理想の生活はこういうものだったんだろう？

政男

…確かに前はそう思ってた。でも、今はこれでいいんだろうかっていう思いが強いんだ。なぜなのかはよく分からない。でも何て言うか、生活に人間臭さがないっていうのかなあ。

純

分かるよ、お前の気持ちは。実はな、世の中の人みんなお前と同じトンネルを通過してきたんだよ。

政男

っていうと？

純

うん。あれから 10 年の間にいろいろあった。通信衛星や光ファイバーによる通信網の整備と、科学技術の進歩によって、テレビ電話や当時で言うマルチメディアが爆発的に一般家庭へも普及した。その影響は大きかったよ。何しろ、実際に外出することが少なくなったね。家にいながら買い物はできるし、銀行の金の出し入れも自由。会社の仕事も今はほとんど家でできる。逆に、出勤すると

きは遊びに行くようなもんだ。子供は、毎日学校に行く必要もなく、家で効果的に勉強している。世界中のだれとでも、それぞれ自宅にしながら話せる。

政男 そうか！ 前に言われていたホームショッピングやバンキング、それに在宅勤務も実現したんだ。ということは、労働時間も短縮された？

純 もちろんだよ。今じゃ就労時間は一日 5 時間以内、週休 3 日って、国際労働基準法で決まっているよ。

政男 やっぱりそうか。おれが想像していたとおりだ。じゃあ、当然のことながら余暇も増えて、豊かな生活ができるじゃないか。

純 ところが、そう簡単にはいかなかった。余暇が増えても、それを活用できない人々が増えてきたんだ。特に日本ではね。

政男 もしかして自殺者が増えたとか…。

純 そのとおり。生活水準が高くなり、余暇も増え、快適な生活ができるようになったのに、生きてることの意味を見出せずに死を選ぶ人が続出してきたんだ。

政男 でも、それなりに楽しい生活を送れたんじゃないのか？ いろんな新しい娯楽とかも出てきただろうし。

純 そう。人々は余った時間をどう楽しく過ごそうかと、いろんな娯楽を考え出した。でも、しょせん、ご楽によって人間の心は満たされない。逆に、人の心はすさみ、むなしさを覚えるようになっていった。非合法の麻薬のような薬が大量にちまたに出回った時もあった。

政男 どのように生きていったらいいのか…。何のために自分は生きているのか…。

純 そう、みんな心の奥底に、その疑問を抱えていたんだ。

政男 いや、それは今のおれの気持ちだ。こんなことになるまで、そんなこと考えてみたこともなかった。最初は、おふくろの死を聞かされて沈んでいたんだけど、そのうち、何だかおやじまでいらないように思えてきたんだ。心配してよくテレビ電話で様子を見てはくれる。確かにそれで事は足りてるし、合理的で、十分に機能しているよ。けど…、おれがこんなこと言うのは理屈に合わないんだけど、やっぱ、こうして直接会って話したいんだよね。自分が何だか独りぼっちのような気がしてしょうがなかった。もし快適な生活がこんなもんだったら、一体おれは何を目標にして生きていたんだろうって思えてきて。それで…。

純 そうだね。結局、科学も医学も本当の意味で人間の生活を快適にはしてくれなかった。確かにその助けにはなってくれるけどね。外側の環境がどんなに便利になっても、人は幸せになれない。結局、行き着くところは、心の世界の問題なんだよね。科学は、神を否定し、人間が偶然に発生し、進化したと説明した。科学の発展こそが人類の幸福であり、仮に神がいたとしても必要ない、そう言ってきた。しかし、それが間違っていたことに人々は今、気づき始めている。

政男 そっか。…それでおやじもあんなに変わったのかあ…。ということは、いろんな



宗教や哲学が出てきたってことだろう？ おやじはクリスチャンになったって言うけど、お前はその問題をどう解決したんだ？

純 ま、おれの話をして、まだ今のお前には参考にならないだろうなあ。

政男 何だよ。もったいぶってないで言えよ。

純 おれも、神と人のために生きることにした。

政男 神と人のために生きる？

純 ああ。まあ、お前はお前の答えを見つけることだ。もちろん、天国で会えるようになってほしいけどな。

政男 「天国で会える」か。おやじも言ってた…。

純 会いたいだろ。そう思ってお連れしたんだ。お父さん！

父 政男、大丈夫か！

政男 父さん、父さん！ 会いたかったよ、父さん、おれ…。(泣き声)

父 (エコーから途中で普通の声) 政男！ わたした。分かるか、父さんだ。

政男 父さん！

医師 気づかれたようですね。よかった。もう大丈夫でしょう。

政男 父さん、おれ、どうしたの？ ここはどこ？

父 病院だよ。お前が急に倒れたらしいって、こちらの朝倉君が家に飛んできてくれて、救急車で運んだんだ。丸 24 時間、意識不明だったんだぞ。だがよかった。ほら、朝倉君も、由美さんもいるぞ。

政男 純！ 由美！

医師 それにしても、かなり無理をしてたでしょう。内臓の機能も少し弱ってる。2、3 日、ここで療養したほうがいいでしょう。

政男 父さん、母さんは？ もしかして死んでない？

父 何言ってるんだ。ずーっと寝ないで看病してたんで、今さっき、少し休みにうちに帰ったよ。

政男 ああよかった。由美、ごめんな。お前の気持ち、ちっとも考えないで。おれ、思ったんだ。世の中どんどんデジタルの世界になって、いつの間にか、おれもそれにはまり込んでた。でもやっぱり本当に大事なものは、アナログ、人を大事にして、思ってることを素直に、分かる言葉で相手にじかに伝えることじゃないかって。

由美 そう。うれしいわ。お母様と一緒にずっと付いていたかいがあった(笑い)。でもせっかくなのために作りかけたプログラムだから、見てみたい気もするな。

政男 見るたって、まだ途中だから、おれとお前を足して2で割ったような、ヘンな顔だぞ。

由美 だから見たいのよ。

政男 何で？

由美 分かってないわね。やっぱりデジタル思考なんだから。もしかして将来政男と結

婚したら、2人の赤ちゃんもこんな顔になるかなって想像できるでしょ。

政男

由美、お前…。

純

デジタル化の波も、神様と女性の心は変えられないか。(一同笑い)

政男

神様って言えば、純、お前、もしかして神様と人のために働きたいのか？

純

…何でそれを知ってるの？ うん。おれ、この間の阪神大震災で、ボランティアに行っけ。すごく思わされたんだよ。物質的な豊かさが、いかにもろいか。極限状況の中で、人間に本当に必要なのは、心のケアだ。生きる心の支え、よりどころを持つことなんだ。これは、イエス様の愛を伝えたい。それも、人に仕えながら、伝えていきたい。具体的にどうしたらいいか、今祈ってるとこなんだ。

政男

ふーん。なんか、今のおれにはマブしいな、お前は。そうだ、父さん、そして由美も、今度教会に行ってみないか？

父

ん？ 教会か。うん、わたしも会社でどんどんリストラが進んで、いろいろ、身の振り方というか、その、朝倉君の言う「心のよりどころ」を考えてたところだ。じゃ一度、母さんも連れてみんなで行ってみるか。

政男

決まりだ。きっと父さん、おれより先に信じるよ。

父

ん？

由美

政男ったら、一晩たったら予言者になったみたい。(一同笑い)

ナレーション

その時、おれは心の中で思っていた。あれはきっと、神様が見せてくれた夢なんだ。デジタル・ワールドに生きるおれが、神様にあるアナログを、人間らしい心を取り戻すために――。

(完)